

令和元年度アマノリ養殖概況

加藤慎治

育苗時期の海水温は期間を通じて水産研究課鳴門庁舎の汲み上げ海水で平年よりも1℃程度高めで推移し、また育苗期間中にコシノディスカス・ワイレシーの発生により漁場の栄養塩が減少するなど網管理に苦慮する場面が見られた。12月以降順次本養殖が開始されたが、例年に比べて漁場の水温が1～2℃高く推移したため、出庫後のノリ芽の生長が悪く、比較的水温降下の早かった県南漁場を除き、主力の県北漁場では秋芽網はほとんど生産に結びつかなかった。年明け以降も高水温の状態が継続していたものの、2月以降冷凍網に切り替えた県北漁場では生産が好転した。令和元年漁期はユーカンピアの発生がほとんどみられなかったため、県下ノリ漁場全域のDIN濃度は終盤までが2 μg-at/L以上で推移したため、水温が低下した2月以降は昨年度と比べ生産が増加した。

平成30、令和元年度の徳島県漁連共販数量の経月変化を図1に、年度別に共販数量と平均単価の推移を図2に示した。漁期初めは高水温による生育不良で12月の共販枚数は0枚であったが、年明け以降は前年を上回る生産となった。前年比については、1月が585%、2月が224%、3月が108%、4月は209%であった。秋芽網の不振はあったものの顕著な色落ち被害が発生しなかったためと考えられる(図1)。

令和元年度漁期の共販枚数は24,745千枚で、前年比165%と増加したが、前年が過去最低の生産枚数であったことから過去10年の平均と比較すると約30%であった。平均単価は、全国的なノリの不作を受けて12.09円(前年比115.3%)であった(図2)。

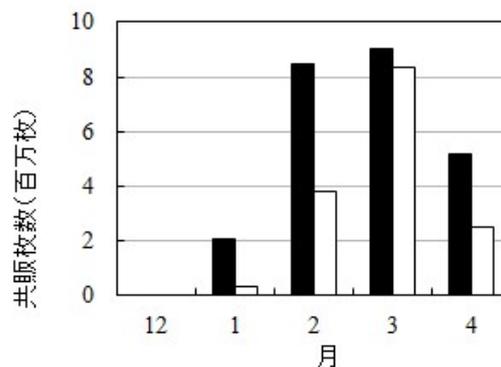


図1. 共販枚数の経月変化
□:平成30年度；■:令和元年度

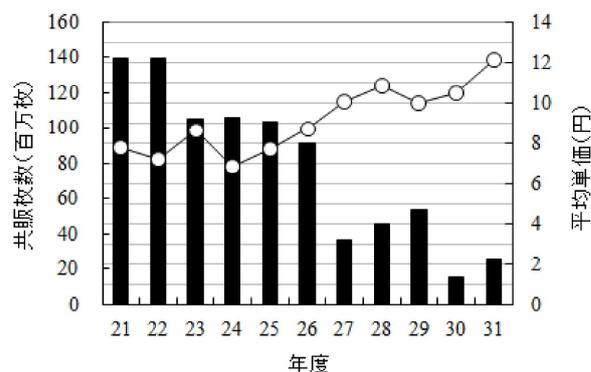


図2. 年度別共販枚数と平均単価の推移
■:共販枚数, ○:平均単価